

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

特集

創刊110年企画

『幼児の教育』

アーカイブズ集1

1

2011
特別号



幼児の教育

第110巻 第1号

目次

● 巻頭言 ●

- 月刊『幼児の教育』特別号のモチーフ(1)
— 折り返し地点から振り返る — 浜口順子

4

● — 歴代編集主幹による — 『幼児の教育』にかけた思い(1) ●

- 子どもたちと未来をつくっていくための雑誌として 田代和美

8

● 特集 ●

創刊110年企画『幼児の教育』アーカイブズ集 1

- 倉橋惣三の『省察』に学ぶ
— 幼児教育の反省および座談会の記事から — 佐治由美子

14

- 「善良なる性情 — われらの反省 —」 倉橋惣三
(第26巻第9号より)

- 「幼児保育者の反省 — 驍の根底 —」 倉橋惣三
(第43巻第3号より)
-

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第110巻 第1号

「幼児教育の反省 — 年頭語 —」 倉橋惣三

(第49巻 第1号より)

「座談会 仲間にはいない子 仲間にはいけない子」

(第31巻 第12号より)

「いい子を語る (幼稚園座談会)」

(第32巻 第1号より)



● 園のくらしを育む 10 ●

日本の保育文化 (4) — 行事と製作 — 秋田喜代美

54

● 保育の現場から ●

地域に生きる 佐藤キミ男

58

卷頭言

月刊『幼児の教育』 特別号のモチーフ(1)

―― 折り返し地点から振り返る ――

浜口順子

「女の子と犬」の表紙のままで

今月号の冊子をお手に取られて、様子がいつもと違うことにお気づきになった読者の方もいらっしゃるかもしれません。「毎年、新年号の表紙は新しい図柄になるのに、犬に手をさしのべている女の子の絵は、昨年と同じじゃないかしら？」と。実は、今月号から三月号までを、本誌の歴史を振り返る「特別号」としてお送りすることにいたしました。

『幼児の教育』は今年で第一一〇巻になります。一九〇一(明治三四)年、『婦人と子ども』という誌名で第一巻第一号を発刊してから一一〇年。昨年は倉橋惣三先生の没後五十五年の年でしたから、ちょうどその二倍。駅伝リレーに例えれば、津守真先生が倉橋先生から編集長(編集主幹)のバトンを受け取ったところを折り返し地



点とすると、今またスタート地点に立っていることになります。

『幼児の教育』は、戦後間もなくの一時期を除いて、年間十二回のペースで発行されてきました。明治〜平成の時代の中で、本誌の保育界への影響力や社会的な意味付けは大きく変動せざるを得ませんでした。今、「団塊の世代」が定年を迎え、平成生まれがそろそろ親になり始める時代に、このA5版の雑誌はどこに向かっていくべきなのか、この辺で腰を据えてじっくり考え、次の新しい一歩をどう踏み出すか、一から問い直そうとしています。しばしたらずんで後先を見定めるために、三か月、昨年と同じ図柄の表紙で過ごす時間をいただくこうと思います。

アーカイブズ特集で『幼児の教育』を振り返る

三回にわたる特別号では、三つの視点から、弊誌一〇〇年を振り返ろうと思えます。第一回目の今月は、その振り返りを象徴するかのように、「省察」がキーワードになっています。今月号をばらばらと繰っていただくと、全体の半分近くのページ数が、過去の『幼児の教育』からの記事であることがおわかりでしょう。編集部として、初めは昔の表記どおり転載するつもりでした。でも今回紹介するアーカイブズは、戦前の記事が多いため、旧字の読みを判明するだけでもなかなか大変のようですので、読みやすい文字遣いに変更してあります。



読みやすいとはいっても、時代の違いからくる読みにくさはあります。しかし、その読みにくさこそ、逆に、現代の私たちの位置を浮き彫りにしてくれると感じます。後半の座談会記事では、幼稚園の先生方が当たり前に語るその言葉遣いに違和感を感じたり、子どものとらえどころの違い、はたまた笑うツボの違いまでも垣間見えたりして大変興味深いものです。でもやはり現代に通ずるものも感じたり、モノ言いの率直な感じにはさわやかさを覚えたりもします。

一昨年から、『幼児の教育』のバックナンバーのネット公開が始まり、現在は、二〇〇七（平成十九）年十二月号までの全内容が検索して容易に読める状態になっています。まだご覧になったことがない方は、ぜひ奥付（六四ページ）にあるURLまでアクセスしてください。気になる言葉の検索をしてみると意外な記事にぶつかります。読者お一人おひとりが編む「私のアーカイブズ特集」のようなものから、自分らしい保育研究を始めたたり広げたりして下さったら嬉しく思います。

戦後の『幼児の教育』を支えてきた編集主幹たちの言葉

一一〇年間という本誌の歴史の後半部分は、津守真先生（一九五五年～）から本田和子先生（一九八三年～）、田代和美先生（一九九五年～）、そして現在の浜口（二〇〇四年～）へと編集主幹の任がリレーされてきています。本誌はそもそも、



日本幼稚園協会の前身「フレイベル会」の機関誌として発刊されたのですが、その「フレイベル会」とは東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）附属幼稚園の保姆（保育者）団体を母体とした研究団体でした。そのため、本誌の編集主幹は代々、お茶の水女子大学の保育領域周辺を担当する教員が受け継いできています。不肖私がこの重責を田代先生から託されたばかりのころは、初代編集主幹中村五六先生と東基吉先生から引き継がれてきた一世紀以上の長い足跡をいっぺんに穢すことになりはしないか、と肩の荷も気持ちも重かったものです。でも、附属幼稚園の先生方や編集担当者、大学の同僚たち、そしてフレイベル館編集部を支えられつつ、しだいに『幼児の教育』を今後も作り続ける意味を追求していこうという意思が、お互いの中で一層強くなってきましたようです。

「特別号」では、戦後のバトンをつないでくださった三人の方々に、元編集主幹として『幼児の教育』への思いを綴っていただきます。今月号はまず田代先生、二月号は本田先生、三月号は津守先生にご登場いただく予定です。

この折り返し地点を新たなスターティングポイントにして、若葉のころにはりニューアル版『幼児の教育』をお届けできるよう準備してまいりたいと存じます。

（お茶の水女子大学大学院准教授）

子どもたちと未来をつくっていくための

雑誌として

田代和美



『幼児の教育』の編集にかかわり始めた当初の記憶として懐かしさと共に思い出されるのは、お茶の水女子大学附属幼稚園の先生方と一緒に編集会議とおしゃべりともつかぬ時間を過ごした西日の当たる本田先生の研究室である。学外の方からは本田先生の研究室の大学院生と間違えられることもあったほど、私は心もとなさを身にまといながら、話を聞くのをただ楽しんで過ごしていたように思う。『幼児の教育』を初めて手にして第一巻から読み始めたころの、古い本独特のほこりとかびが混ざったようなにおいと、ほこりまみれの手も懐かしく思い出される。

自分がバトンを辛うじてつなげられた期間については、編集を担ってくださった仲明子さんを抜きには語れない。二人三脚で歩んできた九年間だった。常に六か月分

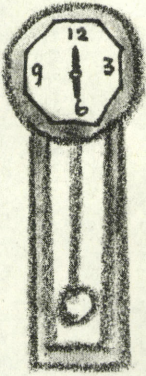
の編集作業が動いていたので、ほぼ毎日、二人で何かしらの打ち合わせや相談をしていた九年間だった。編集委員の附属幼稚園の先生方は、それぞれに独特のカラーと柔らかくみずみずしい感性をもち、また幅広い人脈をもっていて、保育の現場のみならず、保育に連なるさまざまな世界との架け橋を渡す上で力を發揮してくださった。長年にわたって挿絵を描いてくださった彌永たえさん。表紙を描いてくださった方々。そして採算を度外視して下さり続けたフレイベル館の方々。多くの方々の力があって何とか続けられたことに感謝している。

保育の場で繰り広げられる出来事は、保育の世界で仕事を始めた時期の私にとってこの上なく興味深いものだった。現場の保育者が実践を振り返りながら丁寧な言葉を紡いだ文章を読むことが、編集に携わる者としては何よりも楽しみであり、それらの文章は雑誌の核だった。当時、附属幼稚園の先生方と一緒に子どもたちのことを語り合う時間をもてるようになったきっかけも『幼児の教育』の編集に携わったことに端を発していたと思う。現場の先生方と子どもを語り合う時間は私にとって最大の楽しみであり、刺激であり、学びであり、その後の自分の仕事の方向に大きな影響を与えてもらった。とどまることなく動いている保育の場での事象を言葉にすくって語ったり、文章としてとどめたその中に、それぞれの人のストーリーがあった。それらのストーリーに触れることを通して、「明日」は子どもたちと一緒に新しく生み出せるのだという希望を感じ取っていた。

『幼児の教育』も、保育の場と同様に、私にとつては生き物のように動いているものだった。保育雑誌である以上、当然、保育を核として編集していたのだが、『幼児の教育』と称してはいても、その中では保育の世界での事象と保育の外の世界での事象が常に、図と地の関係のように揺れ動いていた。保育の世界が図になり始めると、その方向に集約していくのだが、集約していくと私たちにブレイキがかかり、外の世界に目が向かい始める。保育の外の世界に目を向け始めると、一見保育とは関係がないかのように見える世界が図になって、これが保育雑誌なのかと思うような構成になり、またブレイキがかかる。核に集約していくと外を向き、外を向き過ぎると核に集約しようとする。それを繰り返していたように思う。雑誌の編集方針の一つとして「幼稚園の先生としての根本問題で、遠く保育に関係があつて保母にふわりとした感じを與える記事を入れる。この場合、心理学者ではなく、社会の各方面の人を取り入れる」という倉橋先生から津守先生が引き継いだ方針があつたことが、この揺れ動きに影響していたのだと思うが、必ずしもふわりとした感じを與える記事でもなかつたようにも思う。思えばこの揺れ動きを今も繰り返している自分がある。子どもたちが未来に向かつて人としてよりよく育つてほしいと願いながら、自分が子どもや大人とかかわる時の、子どもたちにとつてのよりよさとは何かを求めて。

今から十年前、第一〇〇巻を迎えた年に、先代・先々代の発行人である本田先生と津守先生をお迎えして、これまでの『幼児の教育』にまつわる話を伺う機会を得た

〔「幼児の教育」第一〇〇巻第四号〕。その中で津守先生は「今、この現代を考えてみるとね、子どもが変わったかどうかというよりも、社会全体がひっくりかえっちゃってるね。……中略……戦前から戦中戦後つて引きずってる何かがあると思うんですよ。それが今このところで、全部ひっくりかえっている」と述べ、それを受けて本田先生は「すばつと切れたんですね。違うものがすぽんと入ってきた」と述べた。この時には、それでも幼児教育は、状況の変化の中で、一番基本的には変わらないで、一番大切なものを培える場所なのではないかという話になった。それに違はないと思うが、しかしこの十年間にも加速度的に子どもを取り巻く状況は変化し続けている。人が生活を営む大前提が変わり続けている。生活の中心が消費になり、消費の対象が付加価値になり、付加価値は求めても際限がなく……常に先々を追いかけて、「今ここ」が大切にされない時間が流れている。そのような時間の流れに子どもたちをうまく乗せていくことが子どもたちを育てることだとは思えないが、しかし現にそのような時間の流れの中で子どもたちは日々生活しているという、育てる側の人間としてのジレンマを感じる。



現在、私は巡回相談という形で保育の場に伺い、保育者と語り合う場をもち続けているが、幼児が幼児としての時間を生きることを保障してもらえなくなりつつあることを肌で感じてい

る。一つひとつの物事とゆっくり触れ合って確かめたり、身体でおしゃべりしたりする経験を積むことなく、張りぼてのように外側に言葉が張り付いていたり、視覚ばかりを使っていたり。人が育っていくスピードは消費生活のスピードのように早々には変わらない。いずれ人として備わっているさまざまな能力のうちで使われない力が自然淘汰されていくのかもしれないが、それは進化の過程でかなりの時間をかけて緩やかに進行していくものだろう。人の育ちの過程が十年二十年単位では変化しないのだとすれば、乳幼児期の成長のプロセスをまさに身の丈に合わせて経ていく時間と経験の場を守ってあげたい。まさに保育の「真は新」であることを確固として死守したいと思う。しかし死守の仕方を工夫しないと、保育の世界が外の世界と通行不可能な隔絶された世界になってしまうのではないか。「子どものため」を前面に出すことで、逆に子どもの存在が疎まれはしないかと危惧する私がいる。効率とは無関係な子どもの時間を生きることが、いかに土台として私たちを支えているのかを伝えたり、子どもを育てる側の大人が消費とは違う楽しさを感じられるように工夫したりしながら、保育の「真」を柔らかく死守する知恵と技が必要になっている。それが遠く保育に関係がある、子どもにも大人にも共通する世界が私にとって必要な一つの理由である。

子どもたちのことを語り合う場は、大人が子どもたちにとってのよりよさを考え合う場である。子どもたちにとってのよりよさとは、子どもが自分を好きになることであつたり、周りの人と一緒に生活しやすくなることであつたりする。それがなぜより

よく育つことにつながるのか、何を大切にすることが子どもたちが未来に向かつて人としてよりよく育っていくことになるのかを語り合うことは、私たちが大人としての時代の道をどう生きていくことをよりよいと考えているのかと切り離すことはできない。子どもに対する「保育者」としての存在だけでなく、今の時代を生きる大人としてどのように生きているのかが問われることになる。現代の社会で個人として消費することに終始せずに、個だけで完結しない楽しさや豊かさを求めていく大人としての姿勢と、それらを実際に子どもたちと共有すること、伝えていくことが保育者に求められているのだと思う。それは保育者養成を仕事とする者として、学生を育てながら子どもに対応する術は身についても、子どもたちへの長期的なスパンでのビジョンをもつことはできない。遠く保育に関係がある世界に開かれていることは、私たちが時代の変化にただ流されているのではなく、希望をもって未来をつくっていく仲間として子どもたちにまなざしを向けることができる人になるためにも、私にとって必要なのである。

『幼児の教育』が、これからも保育の真を核としながら、子どもたちと未来をつつていく者たちにとって希望を見いだせる雑誌であり続けますように。

(大妻女子大学児童学科)

◆特集◆

創刊二一〇年企画 『幼児の教育』アーカイブズ集 1

倉橋惣三の『省察』に学ぶ

— 幼児教育の反省および座談会の記事から —

佐治由美子

一一〇年間にわたって発行され続けてきた『幼児の教育』の、その冊子の厚みは、日本の保育・幼児教育がその源から現在に至るまで連続として歩んできた歴史の一端を、そのままに物語っていると云っても過言ではないでしょう。

このたび特集が企画され、ネット版『幼児の教育』を用いて保育を論じる機会に恵まれました。

保育実践に関心をもつ私は、まず「省察」を検索語に選びましたが、検出された記事はごく最近のもの

のばかりでした。アーカイブズ、つまり古文書として価値のあるものを掘り出したいという気持ちも働き、キーワードを「反省」として検索し直しました。すると、再度検出された記事の中に、倉橋惣三の筆になるものが3件含まれていました。

倉橋は、その著書『育ての心（上）』^{注1}において、「自分の為ための教育」「自己教育」「反省」「自らを新たにする努力」などの言葉を用いて、自らを振り返る保育者の姿を描き出しました。その倉橋が、『幼児の

教育』誌上で保育者の「反省」についてどのように論じていたのか、この3件の記事から詳細にたどってみようと考えました。

ざっと概観する中で、「幼児教育に反省が欠けやすいこと」の原因が分析されたり、「善良なる性情」一つをとっても保育者自身が子どもを「涵養」し得るほど豊かにそれを内面に有しているかと問いかけられたりしているところに目が留まりました。

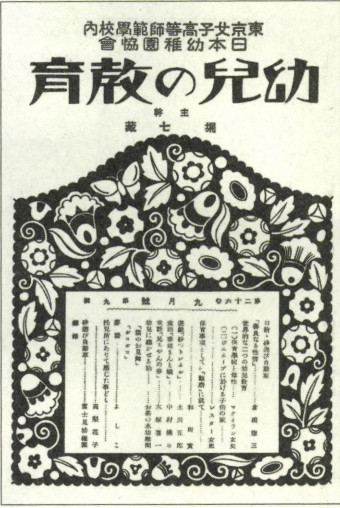
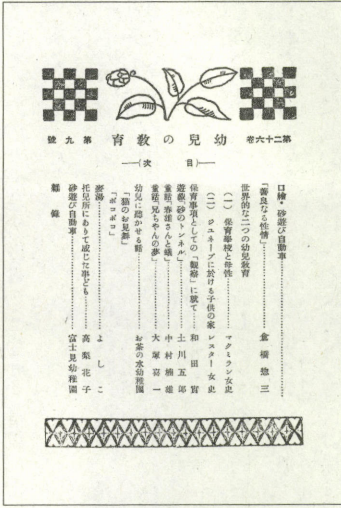
保育者にとっての日々の反省は、翌日の保育をまた一歩進めていく上で欠くことのできないものであるその一方で、自分の認識という閉じた枠組みの中できると自らの限界にぶつかるといふ面もあることを、改めて考えさせられました。

そこで、テーマに沿って考えを進めていく中で、保育を振り返ることの厳しさを熟知していた倉橋が、東京女子高等師範学校（以下、女高師）附属幼稚園（現お茶の水女子大学附属幼稚園）の保母たち（戦前には、幼稚園教諭は幼稚園保母と呼ばれました）と座談会を重ねていたことに思い至りました。その詳

細については、立浪澄子「倉橋惣三と女高師附属幼稚園保母たちの実践研究の歩み」（『幼児の教育』第一〇八巻第十二号）を参照していただきたいのですが、本稿では、その「座談会」の記事の中から2件を選び出し、子どもの姿について語り合う中で個々の省察が促されていくような場の生成、それは現代の言葉に置き換えるなら保育カンファレンスと呼ばれるのでしょうか、その学び合いの様相を手掛かりに、個々の省察に資する共同省察について考えてみたいと思います。

まず初めに、幼児教育の反省に関する記事3件を転載し、その当時の味わいあるテキストを手掛かりに、倉橋の『省察』に迫っていくことにします。

本稿では、アーカイブズ記事の再録に際して、旧字体は新字体に、歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに改めました。また、『幼児の教育』誌発行当時の時代背景や、倉橋の言葉遣いの関連性をストレートにお伝えするため、できるだけ原文のまま掲載いたしました。



▲『幼の教育』第26卷第9号の表紙と目次

一九二六年「幼の教育」より

善良なる性情

— われらの反省 —

倉橋惣三

新幼稚園令の傑作の一つは、幼稚園の目的を規定せる第一条劈頭において、善良なる性情の涵養という語句を用いたることである。旧規定において、善良なる習慣といつていたのをあらためられたのであつて、簡單なる辞句の変更として見るには、あまりに深い差異である。

善良なる習慣という辞句も、解しようによつては、相当の深さあるものには相違ない。往々にして浅く解せられたごとく、単に外形的習慣という意味に止まるものではない。心性全体の習慣はすなわち一種の性格と見らるるものであつて、正しき考え方、美

しき感じ方の習慣は、すなわち、正しき美しき性格にほかならぬともいえる。少なくとも、外部行動の機械的習慣というごときものに限られたのではない。しかしながら、習慣という辞句自身は要するに、生活に対する形式方面の辞であつて、従つて、教育方法上の響きを多分に有している。習慣そのものが目的にあらずして、習慣によつて性格の作られるのが目的であつてみれば、すなわち、習慣は一種の方法上の途である。これに対して、性情なる一語、端的に幼児教育の目的の内容を提示しきつたものであつて、そこに、大いなる差別を認めざるを得ない。

しかも、そうした比較論はしばらく別として、より重要な問題は、善良なる性情そのものの意義である。善良なる性情とは果たしていかなるものか。これこそ、徹底的に、詳密に、幼児教育者の研究しなければならぬ幼児倫理学である。善良というといえども、幼児生活における善良とは何か、性情というも、幼児生活における性情とは何か、必ずしも、単に常識的に片づけられる問題ではないのである。

二

しかも、吾人のここに語らんとするは、その詳しく学問的研究ではない。幼稚園がこの目的を誤らざらんために、とにかく必要なる、保母その人の性情についてである。保母その人が必ず有しなければならぬ、善良なる性情そのものについてである。これは、われら大人同士のことだけに、幼児の場合よりは簡單明瞭に理解せられ得ることである。しかし、考えるには明瞭なことであるが、実際においては、むつかしいことである。あえて問う、幼児に善良なる性情を涵養せんとするわれらは、自ら善良なる性情を潤沢に豊富に有し得ているや。またあえて思う。幼児には善良なる性情がえつて豊かにあり、われらにこそ、その難きを思わざるを得ないであるまいか。善良なる性情の欠けやすきは、われらにこそ、かえつて多いのであるまいか。ほかのことはとにかくも、善良なる性情については、われらの方が幼児から教えらるること多いのではあるまいか。——善良なる習慣ならば、あるいはわれらが先にして、幼

児が与えられることも多かつたかもしれない。性情そのものの真実においては、それがかえって逆しまになることの多いことではあるまいか。

性情は性情である。知識でない。行動でない。理でない。形でない。「善良」に関してよく知り、

「善良」を行うことに過ちなしとして、それですぐに、性情そのものが善良なりや否やは別のことである。善良の性情とは善良である、ことそれ自体である。善良なる存在、善良なる実質そのものである。行い方よりも深く、考え方よりも濃いかな、性そのものの実の姿である。——それが大人にむつかしいのである。大人なるが故にまたしてもむつかしいのである。神に肖る幼児たちには実の姿ではあつても、われらには、このわれらには、影の姿となりやすいものなのである。

三

今日もまた、幼児たちに善良なる性情を養わんとて幼稚園にゆく。しかも、あの小さき、善良なる性情の所有者たちの前に、自ら恥じざる人幾人かある。

誤りて考え、過ちて行い、不完全と、不整頓と、時には粗野と、無作法との間にさえ、きらめくごとき善良の性情におのずからに頭の垂るるを禁じ得ないのが常である。性情は、しばしば、地殻の下に潜在する。あの頑なな、岩石の割れ目に、ほとばしり出づる真清水の清浄さよ。性情はまた、しばしば、未熟の果実の中に包まれる。あの醜い表皮を透して、かおり出づる芳香のすがすがしさよ。整えおさめ、時には、形づくりよそおい、而して、下に穢土を蔵し、裡に腐臭を貯うるものの、その外面の善。上表の良。辛うじて「善」と「良」とに制せられて、不良にして不善なる性情の实在者。習性の卑怯と詭點とに自ら己を欺き、知らずして己をよそおう天真の欠如者、——用語の過激なるを咎むるなかれ、幼児の前に、恥じ隠れんとするわれらの実相は皆これである。——今日もまた、幼児たちに善良の性情を養わんとして幼稚園にゆく。自ら恥じて呆然たざるもの幾人かある。

ある。あるいは、反省というよりも、幼児保育の一般的心がけといった方がいいかもしれない。反省とは、どこかに自分の陥りやすい欠点のかすかな自責があつて、それがおのずから省みられずにいられないのである。

一、保育中、ほかのことを考えてはいなかったか。

一、幼児をうるさいとは思わなかったか。

一、幼児を相手に腹を立てはしなかったか。

これは一例に過ぎないが、こうした諸点はその人その人によつて、相当に傷にさわる痛さを感じるところであろう。

更に、教育者としての普通の反省に、自分の能力、実力に就いての反省がある。自分の絵のまずさ、自分の歌の下手さ、自分の観察に就いての無知さ、等々である。前の二項の反省がやや保育になれた者の反省であるに比して、この種の反省は、保育そのものの経験がまだ反省期に入らない間の人々の反省である。これによつて自ら進歩してゆくことが出来るのであるが、実は、きりのない話かもしれない。

と同時に、自ら到らざるを反省し得たとしても、今すぐどうすることも出来ない。それをのみ氣にかけては、保育の力もなくなるを免れない訳でもある。むしろ、その到らざるをもつてして、幼児のために一層よく尽くしているか否かこそ、幼児保育上のきよ、うの反省であろう。

しかもここに、きよ、うのというやや断片的な反省に対して、自分そのものの継続的な反省ともいうものがある。幼児に対し、きよ、う、どうしたか、しなかつたかというよりも、自分そのものの性質が、個性が、趣味が、あまりにもありありと日々の保育にあらわれてくることの、そのそらおそろしさの反省である。

これに就いて、自分というものに関して、何ら氣にかからない人々と、それを知らないではないが、しかたがないではないかと平然たる人々と二種ある。前者を暢氣のんきといわれているが、後者を何といおうか。とにかくそのいづれたるを問わず、その人そのものに進歩も改善も向上も期し得ないことは一つである。

のみならず、その人らしい、あまりにもその人らしい傾向に幼児を型づけてゆくことは、保育の結果の上の大きな憂慮である。もちろん教育は何としても、その人らしい感化を与えることに相違ないが、その人らしいのみ偏らされるのは警戒を要することである。というよりも、あまりにもわれの欠点に添うて偏らすことはなきか、これこそ大きな反省でなければならぬはずである。しかし、自分と肖たものを作つて、そこに反省の機会が失われてゆくこともまた、注意を要する点といわなければならない。

反省は日々である。しかも、保育に一段落を感じさせられる保育終了期の三月は、一種の総決算的反省の時である。そして、その反省は、今自分を離れてゆく子らの後姿に、ありありと何ものかを見せつけられる反省であつたりする。また、漫然たる総決算的結論的であるのみでなく、あの日、あの時の反省的追憶が、ありありもう一度浮び来ることのあるものである。あるいはまたその時それほどに反省も

しなかつたことが、なぜか、今にしてひしひしと追いつ迫ることのあるものでもある。なぜかではない。あちらではそんなことなど忘れ切つて、ただ今日の嬉しさに礼などという幼いものの顔が、かえつて、その相済まなさを引っぱり出してくるのである。

保育終了の三月は、幼児教育者にとつてさびしい月である。それは、今まで慣れ親しんだ子らが、今日から離れてゆくからであることはもちろんであるが、あるいはまた、あまりにも幼児保育者としての自分が、ぴつしやりと反省させられる月であるからかもしれない。

しかも、このさびしさは、ほんとうの自分へのさびしさは、一年一年、自分を幼児保育者として進め、深めてゆく、大きな力でもある。すなわち三月は、幼児にとつての進展の月であるばかりでなく、先生にとつても、進展の月であるのである。ただ、その進展式を誰も他人がしてくれないだけである。自己の反省だけが自分を進展させてくれるのである。

〔『幼児の教育』第四十三巻第三号より〕

一九五〇年「幼児の教育」より

幼児教育の反省

— 年頭語 —

倉橋惣三

幼児教育は何を反省すべきかを考える前に、なぜ常に厳しく反省しなければならぬかに就いて考えなければならぬ。それはつまり、幼児教育の不充分を言いわけさせるような要素が眞の幼児をめぐって幾つもあるからである。

その一は、幼児教育の効果が、客観的に測定評価されにくいことである。教育の効果そのものが、一般的に必ずしも容易に客観的にあらわし尽くし難いが、幼年期たることに於いて特にそれが著しい。



▲「幼児の教育」第49巻第1号の表紙

強いて、その直接効果を挙げ頭わそうとすると、保育の特質を誤ることもないといけない。そこで、えてして、不徹底におわるを免れない。殊に、その施設教育効果の本質が家庭教育の本質と区分し難いことが多いために、その効果の不充分を互いに護りあつて、自らの責任領域の明らかでないことが多い。

その二は、義務教育へのつながりが、何ら規準的でないゆえにその教育効果への要求が厳しくないことである。その規準が年長児童の場合のごとく画定

的であり、殊に一斉的であることは、幼児教育の本質上強いて求むべきでないところもあるが、そのために、幼児教育の教育的期待効果が、時にあまりに無方針不確定でありやすいことは免れない。

その三は、幼児教育の方針技術が遊戯的のものであるがゆえに、教師もまた、過程を楽ししむところが多くて、あながち効果の期待に綿密でない傾向があることである。幼児と共に楽しむことは幼児教育の肝要要件である。傍に立ちて教ゆるというよりは、生活のうちと共に溶け込むことなしには真の効果を挙げ難いのであるが、その主観性はしばしば反省的たることに適するといえない。

その四は、以上のごとき本質上のことでないが、幼児の保育が社会問題として、厚生問題としての重要性の下に置かるることのために、その効果が量的に考えられたり、幼児教育以外の点において考えられたりすることのために、純教育的効果の厳密さをみつめていられなかったり、時には、それを言いがれたりすることもある。これは、そうした幼児保

育施設についての論評ではなくして、幼児教育の反省の上に及ぼす影響としては、事実の上に考慮せられるべきことである。

以上、その一端を挙げたに過ぎないが、幼児教育に反省の欠けやすいことの所以ゆゑんの分析として、必ずしも個々の幼児教育者その人の責めのみでないことを見たのである。

必ずしも幼児教育者の責めのみではないとしても、幼児教育が無反省であつていいことにはならない。これらの条件下にあることを知って、特に心を教育的に厳にし、純にして、自分の日々の幼児教育を反省しなくてはなるまい。

幼稚園が学校教育法の中に入れられたことは、幼稚園が就学前の教育としての要求に直面させられたことを意味するものである。その教育が同じく学校の名において、就学後の教育と混同せられてならないことが重要であると共に、義務教育たる小学校教育への正しい意味での連携が充分考えられ実行せら

れなければないことも当然の要件である。直接細部の連携はしばらく別としても、それが、国民の幼児期の教育施設としての教育効果を、充分に挙げ得るものでなければならぬ。

保育所は児童福祉法の下にあって、学校教育法の下にないというところから、幼稚園と一つでないとせられているが、その一人一人の幼児に対する教育的反省は、幼稚園と別のものであっていいはずもないし、別のものでなければならぬことのありようはずもない。もし厚生の福祉のために、教育的反省の違いとまがないといわれるようなことがあつたら、厚生の福祉としてはとにかく、幼児の教育的福祉を完まつたするものとはいえない。

すなわち、幼児教育の反省の必要は、幼稚園においても保育所においても区別はない。教育的効果を省みない幼児施設は許さるべからざるものである。

その名の如何いかんを問わないのである。少なくとも本誌は、幼児教育の反省をもつて、あらゆる幼児施設に参加しようこいねがと希う。ある時はその伴侶となり、ある時は

その批判者となるであらうが、いずれにせよ幼児教育の反省を推進することを念とする。

もちろん、教育的反省の名において幼稚園教員が幼児と共に遊ぶことを忘れ、保育所保育が幼児の生活保護を怠る、ことを意味するものではない。保育はどこまでも実際である。その實際を離れて反省もない。実際によつて反省するのである。反省がすぐ實際となるのである。保育の實際は忙しい。しかも、反省を伴わない忙しさは、幼児教育に真に忙しいことといえない。

我国の幼児保育の向上進展するとは、施設の数の増加することでもある。制度の整理せられることでもある。しかし、何より重要なことは、幼児教育の反省の進められ、高められ深められることである。斥しりぞくべきは無反省な麻痺的墮性保育や非良心的營業的保育である。

〔幼児の教育〕第四十九卷第一号より

◆省察という概念

近年、保育サービスが拡大していく社会状況の中で保育の質の低下が懸念され、研究者の間では、その向上につながる実践研究の重要性が語られるようになってきています。実践者を主体とした、日常の保育の延長線にある研究、あるいは、その場に研究者も参加して共に実践を振り返る研究が求められるようになってきているでしょう。

このような動きの中で、「省察」という概念が重視されるようになり、実践者や研究者の間でキーワードとして語られることも増えてきました。

この背景の一つとして、アメリカの心理学者ドナルド・A・ショーンが提唱した「省察的实践者（反省的实践家）^{註2}（*The Reflective Practitioner* 1983）」の考え方が、日本の教育・保育界に浸透してきたことが挙げられると思います。

保育者は、子どもとのやりとりの中で「瞬時に生じては消えゆく束の間の探究としての思考」、すな

わち「行為の中の省察（reflection in action）」を無意識的・直感的に行っています。また、そのやりとりは、必ずしも言語の媒介を必要とせず子どもとの間で身体感覚によって共有されていく知であるという点で、「行為の中の知（knowing in action）」の概念と重なり合っているように思われます。

この「行為の中の省察」「行為の中の知」という考え方は、保育者が立ち止まって自身の実践を振り返ることを意味する従来の省察を軽視するものではありません。ショーンは「行為についての省察（reflection on action）」という概念を提示し、行為者が自身の実践の枠組みを再構成する過程に結び付くという見通しを示しました。このことは、生成し続ける保育の実践に対して幾重にも積み重ねられていく省察の厚みを再定義する上で有効であるといえるでしょう。

ところで保育実践の省察については、それに先立ち一九八〇（昭和五十五）年に、津守真が「省察による思索^{註3}」という言葉を用いて明らかにしています。

津守は省察を、「反省によって、人はそのことを道徳規準に照らして評価するのではなく、まして、後悔して残念に思うのではなく、体験として、ほとんど無意識の中にとらえられている体感の認識に何度も立ち返り、そのことの意味を問う」こととし、「その精神作業は、反省に考察を加えること」である、と定義しています。

◆倉橋の「反省」とは

ここで、倉橋の省察あるいは反省の考え方はどのようなであったか、検索記事に沿ってたどってみることにします。

倉橋は、「善良なる性情^{注4}」の中で、「幼児には善良なる性情がかえって豊かにあり、われらにこそ、その難きを思わざるを得ないであるまいか。(p.17:本稿におけるページ、以下同様)」と、幼児と共にある大人たちへの反省を求めています。そして、「善良の性情とは善良であることそれ自体である。善良なる存在、善良なる実質そのものである。行い方よ

りも深く、考え方よりも濃やかな、性そのものの実の姿である。(p.18)」として、善良なる実質に拠って立つことの難しい大人たちが、幼児に善良なる性情を養うことの困難さを指摘しています。

また、「幼児保育者の反省^{注5}」の中で、「どこかに自分の陥りやすい欠点のかすかな自責があつて、(略)おのずから省みられずにいられない(p.20)」のが反省である、と倉橋は述べています。保育中は最善を尽くしたつもりでいても、振り返ってみると、そこには自分の欠点とその限界があらわであることに気づいて痛みすら感じるのが反省であることを、倉橋は明瞭な言葉で表しました。

さらに、「幼児教育の反省^{注6}」という年頭語の中で、倉橋は一步踏み込んだ反省の定義を展開しています。ここで顕著なことは、幼児教育の反省が、不十分に「心を教育的に厳にし、純にして(p.23)」行われるべきものであるとしている点です。自らに対して厳格でなければ反省に徹することが難しいという示唆

は、多くの保育者に了解しやすい内容であると思われませんが、ここで倉橋は、それと同時に心を純粋に保たなければならぬことを指摘しています。この純粋さとは、何を意味するものでしょうか。

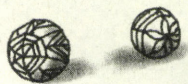
ここで、前述した津守の「省察による思索」に戻って考えてみようと思います。津守は、「反省によつて、人はそのことを道徳規準に照らして評価するのではなく、まして、後悔して残念に思うのではなく……」と述べ、その反省を一步進めたところにある省察の純粋性を明示しています。

このように、省察は、保育を振り返つて自分の足りなかつたことを見つめる時間の中で、向こうから迫ってくるような純なる体験に立ち返り、そこから人間現象の本質に近づくところまでを含んでいるのではないのでしょうか。保育の個別の体験を突き抜けて人間の普遍的な姿に触れていくこと、それが保育の実践と背中合わせになっている研究の醍醐味なのだと思います。日々の実践は、保育者にとっては振り返りの時を確保することすら厳しいのが現状で

しょうが、保育者自身が保育に潤いを保つためにも、省察のひとつときを極力大切にしたいものです。

倉橋は、この年頭語の末尾で、「何より重要なことは、幼児教育の反省の進められ、高められ深められることである。(p.24)」と述べています。保育者の反省が「進められ」てきたことは、これまでの保育界の進展の中に刻まれているのでしようが、それが「高められ深められること」については、省察が広く語られるようになってきた今こそ、緻密な実践研究によつて明らかにされるべき時を迎えているのかもしれない。

次に、座談会記事を2件転載します。極力原文のまま再録したため、座談会の発言が現代の価値観との相違を感じさせるかもしれません。しかし、そのような時代という制約が認められる中で、保育者の個々の省察が促されていく様相を見ていただければと思います。



一九三一年『幼児の教育』より

座談会

仲間にはいらぬ子
仲間にはいらぬ子

東京女子高等師範学校附属幼稚園の一同語る、

十一月二十六日(木)午後、

新庄 久しぶりの座談会でございますね。以前の会で、保育項目は一わたりすみましたから今日は、自由遊びの中で「仲間にはいらぬ子、仲間にはいらぬ子」について、先生(倉橋主事のこと)に伺いたいと思います。自由遊びの方は、今のところ子供たちの遊ぶのを見ているだけのように思えます、もつとどうにかしてやらなければならぬものでしょうか。

倉橋 皆さんのやっついていらつしやる^{おっしやる}ところを仰つたらどうです、どうにかするつたつて、計画的にやるよう^{おっしやる}にあらかじめ定めておくことは出来ない

座談會

仲間にはいらぬ子
仲間にはいらぬ子

東京女子高等師範学校附属幼稚園の一同語る、

十一月二十六日(木)午後

でしょうが、具体的に、機会に応じて子供の生活に出張っていくんですね。実際には子供の相手になつてやることもあるでしょう。

新庄 ハー。「先生、入つてちようだい」つていう時もあります。

倉橋 直接に、遊びのグループに入らなくても、気を利かして遊び道具を持ち出してやつて遊びを助けることもありましようね。

新庄 大きい組になると、自分たちの自由遊びの方がかえつて主な生活ですけれど、小さい組の時はどうでしょう。

倉橋 よく遊ぶ^{おっしやる}タチと始終フラフラブラブラの人がありますね。

及川 大きい組にだってありますよ。

新庄 遊びの仲間に入らないで眺めている子供がございませうがね。

倉橋 一番いいのは、先生が入らなくてもいいので、これに自由遊びが十分發揮されております。とすれば、仲間に入らない子供には先生が代つて遊んでやりますが、何とかしてその子供も仲間遊びの中に入れていくようにしてやらなければ。たとえば、みんなで「遊戯」をしようという時に、遊戯をしない子供には、一緒にするようにさせるためには力を尽くすと同様にです。仲間と遊ばない子は、何とかして子供の社会に入るようにし向けることは大切です。これは「あそび」ということよりも子供が社会に入ることを奨めていく、導いていく、促していくことなのですから。そこで仲間に入らない子供は、どんな場合に入らないかを考えていく順序になりますが、どんなふうで、仲間入りしないのですか。

新庄 簡単にいえば子供らしくなくいつも批判的に

眺めているとでも申しませうか。

倉橋 傍観者ですね。

新庄 友達が遊んでいるのを眺めているのが面白いんでしようね。

倉橋 どのくらいの程度ですか。

新庄 ほかの子の遊んでいるそばで、「あんなことしている、やあ、おかしいな」とか何とか申して……。

倉橋 男の子ですか。

新庄 ハー。

倉橋 ほかに、そんな子はありませんか。

菊池 私の方に二人ほどございますが、それとはタイプが違いますけど——。

新庄 小さい組の時にはそんなふうであっても、大きい組の今ごろになればもう大抵は遊びの中に入ってしまう時期なんですけど。

倉橋 ほかのタイプは別として。

菊池 それは誰？

新庄 Aさん。兄さんも私の組でしたけど、その子

は今ごろはもうすっかりグループに入っていましたわ。自分ではそうやっている方が面白いらしいんですの。べつにつまらなくはないんでしょう。

倉橋 そのAさんの場合にはいろいろの事があるかもしれませんが、普遍的には、傍観者はよくないことです。社会的によくない態度です。

新庄 そのほかによくないことは、大人をくすぐったり、コソコソいたずらをしたり、大人をからかう遊びがたのしみらしいのです。この間父兄会に見えた時にお母さんに聞いてみましたら、家庭でもそんな（な）いたずらをするんですって。椅子に腰かけようと思うでしょう、そうすると後からそつと椅子を引いてしまつて、人が尻もちをつくのが面白いらしいの。一、二度のうちには子供のいたずらと思つて笑つてもいましたがこのごろでは笑えなくなりましたわ。

倉橋 ほかの能力はいかが？

新庄 すぐれておりますの。それで他愛なく遊んでることがばかばかしいんじゃないかと思うんです

けど。

倉橋 自由遊びの大事な要素は社会生活の問題です

からね。家庭ではどんな様子でしょう？ 兄弟は？

新庄 尋常二年の兄と、女学校に行つておりますが、

があつて末子です。家の都合でよく休むのですが、

お休みが多いせいもありやしないかと思ひますわ。

倉橋 ほかの子供たちが入れないっていうことはあ

りませんか。

新庄 みんなに遊んであげて頂だいねとか、また、

さあ遊びましょうと言つてもついと体をかわして

それてしまふんですの、そして廊下をブラブラ遊

んでおります。

及川 行き会つと丁寧におじぎする子でございます

よ。よく休むせいが手伝つておりますよ。前ご

ろ姉が来ていた時は祖父さんがきちょうめんに連

れてきましたよ。今度のお子さんは終始お父さん

ですね。女中さんたちもいるんですよ。お父さん

はご自分の運動のために送つていらつしやるんで

しようよ。

倉橋 仲間に入らないって、そういうことは、多く

の場合、根本の性格で、遺伝的などころがあるんですから、親の方から見ると、自分の性格に似ておりますから、衆愚しゅぐと一緒にならぬことには気が付かなかつたり、あるいはそれでよしとするところがあります。殊に東洋流のまじめさから見るとそれが高尚に見えます。人間は社会性があつて皆と一緒にが愉快に違いありませんが、障碍禁止性があるために、自分の心中には性格上の不満足があります。自分の性格上の不満足を正面から認識することはつらいから、何とか自分をジャスティファイジャスティファイしたい。それに、東洋流の「尚なごとさ」を持つてくるのです。この気持ちが一方向にある親から見ますと、この性質は困る、と思うよりも、この子は皆とは違うんだ、という気持ちから、これでよしとしていることがあります。東洋流では、小さい子供でも、みんなと一緒にワイワイしない子、ツンとした子は偉いとなつていますから。ワイワイやるのは馬鹿俗人である場合もあります、

みんなと一緒にワイワイやるのが人間性なのです。

これが、個人的人格の善悪と並んで、社会生活可能性という問題で、このごろは意を払つております。人と一緒になれないのは悪人じゃない、が社会性の発達からいうと困る。

新庄 まあ、それじゃ、その子には入つてお遊びなさいとしよつ中すすめるほうがいいのでございませぬ。

倉橋 そうですよ。そういう子に対しては幼稚園は、家庭に居るだけより影響がありますよ。中途ハンの貴族主義の奥さんはただネガティブに、みんなに触れてこないで高尚さを維持していることがあります。そんな家庭の子には、ずっと社会性が養われておりますよ。少しばかり能力が皆にすぐれているがために、人間としてレベルになれないとは生意気なことです。訓練の事は訓練をする人の人生観でやることを許されんけりやならないと思うのですが、僕の人生観では、人間として仲間

を見下すことは一等悪い態度だと思ひます。

新庄 いい時期に伺いました。もう少し見放しかけておりました。前のように熱心にすすめなくなつておりましたんです。

倉橋 そういふ場合、性格を離れて、能力の方をアブリシエートする先生もある。

新庄 何でも仕事のこととはそりゃよろしいんですから、私、そう思ひかけていましたわ。

×

徳久 私の組のはそれとは違ひまして、ほとんど口をきかず——四月から一ペンくらいでしようか、私と話したのは——、無表情で、歌も遊戯もいたしません。友達は、ものを言わぬからいやだと申して遊びません。

倉橋 前のは積極的非社交性、それは消極的非社交性ですね。

及川 誰？

徳久 Bさん。

及川・新庄 やっぱり兄さんと似ているわね。

倉橋 それで、自分は楽しいでしようかね。

徳久 幼稚園へは行きたいって申すそうです。

倉橋 社会的生活を求める要求度が違ふんですね。独りではさびしい人と、さびしくない人がある。食いしんぼうと食欲のない人があるようにね。

×

菊池 私の方の一人は、自分では遊びたいのです。

九月から来出した子ですけど。どこの組へでも行つては、遊んでちょうだい、つて申すのです。

倉橋 事實は遊んでもらえないの？

菊池 おままごと遊びに入れてもらつても、じき

「先生僕をする仕事がない」と訴えてきます。

新庄 この間も私の組へやってきて「Cさん、しばらく休んでいらつしゃつたのね、もういいんですか」つてきいたら、「先生にお目にかかろうと思つて来ました」ですつて。いつかもみんなが大変にさわいでおりましたら「幼稚園ですものねー」といいましたわ。

菊池 かわいい子供ですけど、いちいち丁寧な言葉

で詮議立ててをするので時々小にくらしくなりま
す。

倉橋 社会性はあるね。何か、ほかから見ても、くっ
つき悪いものがあるのでしょうか。

新庄 他人からいじめられるわね。

倉橋 口上がちゃんちゃんしている様子だが、オー
ム式ですか。口だけそうなっているのじゃありま
せんか。

菊池 「Cさん『そうでないよ』と言ってごらんな
さい」と言わせるくらい、いつも丁寧な言葉を用
います。

及川 先日、「及川先生の組、椅子一つ、足りない
んじゃない？ 僕の方にこれだけ一つセイが高い
の」って椅子を持ってきました。

菊池 先生方の名をチャント知っております。ほか
の子は存じませんわね。

倉橋 心の態度は顔でカムフラージされているけれ
ども、小生意気ではありませんか。

菊池 憎らしそうなどはございません。熱のあ

る時など、「先生、オデコが熱い」って……。

倉橋 幼稚園の中で一番偉いや。

及川 顔の赤ちゃんらしいのに口で言う事とつり合
わないですね。

倉橋 何がその子をそうさせているかは別として、
その子にはみんながくっつけない。

菊池 仲間に入れてくださいって申すんですけど。
倉橋 入れてくれることは普通にいうものですか。

新庄 グループは自然に出来るのね。
菊池 直接にグループにいうよりも私の方に頼みに
やっています。

も一人は、愉快な子で社交性がありますが、男の
仲間には入れないでそばの女の子などからかうの
です。Dさんです。

及川 兄さんも、そうでしたね。

新庄 あら、また兄弟ね。

菊池 私の組のは私ばかり追っかけてきます。

及川 大人と遊ぼうとするのね。

×

村上 新庄先生の方の問題の子Aさんの仕事の態度

は？

新庄 ちゃんとしますよ。

村上 自ら進んで？

新庄 ええ、仕事が好きなの。

村上 それなら私の方にもおります。

新庄 仕事がしたくてしたくて始終やっております。

そんな子供はも一人おりますけれどもAさんとは違います。

村上 家庭で、仕事をよくするように言われてきて

いるんじゃないかと思えますわ。「今度は何のお時間？ 遊ぶのはいやだから保育室おへやに行くわ」

て。無理に引つ張り出して鬼ごっこ仲間に入ると鬼になりたくて、わざと捕えてもらう。

新庄 それは沢山ありますよ。鬼になりたい子は。

及川 その子には沢山仕事をさせたらどうでしょう。

新庄 天才教育ですね、天才というとおかしいけど。

倉橋 それはやっぱりいいでしょう。能力のすぐれた者にはドンドンさせたいいいでしょう。

村上 一人子で近所に友達がないから友達あそびに

なれないのかもしれませんが。

倉橋 西洋では非社交的だと紳士淑女の資格をそこな害う

のです。西洋と日本と違うところですね。一つ

は、社交的ということが健全な人間性だということ

ころで発達してきたのですし、戦国時代の社交は

損得でやってきたのですから、反対の社交的でない

ことは、いいことだという結論が出ます。どう

も積極的にしる消極的にしる、非社交性はなおし

たい。

社交性はあるけれども仲間になれないのは一皮セ

ルロイドがついているのです。亀の子と亀とはお

母さんに負ぶさってもつらいでしょうな。(哄笑)

ところが、亀の子の場合は皮が透明でないから、

はじめからくつつかないことが分かるけれども、

セルロイドの時には視覚ではくつついているので

す。セルロイドジュエントルマンとセルロイドレ

ディーが結婚した時には、ヤケドでもしなけりや

燃えませんが。(また大笑)

及川 爆発でもすれば。

倉橋 セルロイドマンってものは世の中で採られ

ば、セルロイドがグチャグチャになりますが、人間の的に触れることによって育つためにはハンディキャップですね。

菊池 母親も困ると申しております。

倉橋 気付いていますね。大人だけと居る時には、

生地に触れあい子供同士のようにいきません。

そんなのは中等学校あたりに行つて損をしますね。つとめりやつとめるほどセルロイドが厚くなつ

てね。消極性非社交性なるものは、これはまあ、

三つの中では教育しやすいです。

新庄 時期が来さえすりゃ。

倉橋 一等困るのは新庄さんの方のAだ。書生さん

はいませんか。

及川 書生はおりませんね。ただしお父様が偉くなつてからのお子です。

倉橋 その影響もいくらかありましようね。

及川 大きくなるとみんなと一緒にになりましよう。

新庄 兄さんの方は、このごろ幼稚園に来ると飛び

ついてきますわ。

倉橋 世の中に触れてきたんでしよう。

新庄 幼稚園で触れさせなくつちやいけませんわね。

あきらめちゃ悪いということがわかりました。

倉橋 他人の用、サービスをさせたらどうですか。

及川 特別な子供ばかり集めて先生がやってごらん

になりませんか。

新庄 ええ是非、どうぞ。私共の足りない点をご覧

なすつたらよござんすわ。

倉橋 前に、やったことがありましたね。そうして

多少分析して、対策を研究実施してみても親に話す

る、これがガイダンスですよ。

×

徳久 二人つきりで遊ぶのはどうなんでしょう。

倉橋 (略) 自分と同じ者と仲がよい、生活として

は楽です。一人で皆と離れてるより二人で排他合

名会社を作っているのです。二人だからさびしく

はない。(略) 子供が二人であまり仲がよいのは

望ましいことではありません。親友は差異の結合ですからね。

徳久 私の方のは、一人が幼稚で、片方がはじめはそれをかばう立場だったのですが、二人だけになってしまうました。

倉橋 かばう方は、支配欲が非常にある、片方には寄りかかりたいところがある、丁度都合よい組になったんでしょう。

及川 女の子によくありますね。

新庄 私の組の○○子さんは近ごろ急に××子さんと仲がよくなって前のようにあどけなさが無くなって、いつも自分を用心しているといったふうになりましたの。二学期になって急にいけなくなりしました。

倉橋 二人で、園の裏へ行きますぜ。

新庄 ええそうなんですの。二人を離しておいてもいつの間にか一緒になって。仕事の方もずっと落ちました。

倉橋 幼稚園期にだってコンプレックスといます

幼児の教育

第二十第 號月二十 卷一十三第



内務省高等女子東京
會協園稚幼本日

▲『幼児の教育』第31卷第12号の表紙

か、性的秘密性がありますよ。

×

倉橋 一概にいい子、悪い子、というのは人間として価値をつけるだけで人間としての関係生活を考えなさ過ぎます。価値づけは神様の方の仕事で、我々の仕事は子供の関係位置を考えてやる方にあるのです。

〔『幼児の教育』第三十一卷第十二号より〕

◆子どもの社会性を巡る省察

「仲間にはいない子 仲間にはいれない子^母」の記事は、一九三一（昭和六）年十一月、幼稚園主事（園長）を大学教員と兼務していた倉橋と女高師附属幼稚園の保母一同で行った座談会の筆記録です。

まず初めに、新庄保母が、子どもの自由遊びについては見ているだけになってしまふ保育者のあり方に疑問を感じていたのか、質問をしています。

倉橋は、「皆さんのやっついたらっしゃるところを仰つたらどうです、どうにかするつたつて、計画的にやるようにあらかじめ定めておくことは出来ないでしょうが、具体的に、機会に応じて子供の生活に出張っていくんですね。（p.28）」と答えて、座談会そのものが倉橋に一つの答えを求める場ではなく、さまざまな保育場面に関する話し合いの場となるよう促しています。

新庄保母がその促しに答えて、ある子どもの話を始めると、他の保母からも印象に残る姿が語られ、

活発な意見交換がなされていきます。その話し合いの中から、新庄保母はその子どもへのかかわりのポイントをつかみ、感謝の気持ちを言葉にしています。「いい時期に伺いました。もう少し見放しかけておりました。前のように熱心にすすめなくなっております。前のように熱心にすすめなくなっております。（p.32）」すると、倉橋は、「そういう場合、性格を離れて、能力の方をアプリーションする先生もある。（p.32）」と述べて、子どもへのかかわり方は一通りに定めてしまうものでもなく、いろいろなかわりかたの可能性の中にあることを示唆しています。

こうして、倉橋の促しによりいろいろな子どもたちの姿が語られていく中で、一人ひとりの保母に省察を深めるきっかけが与えられていることが読み取れます。

倉橋は、「自由遊びの大事な要素は社会生活の問題ですからね。（p.30）」と言い、「仲間にはいない子」のあり方を「積極的非社交性（p.32）」、「仲間にはいない子」のあり方を「消極的非社交性（p.32）」

と名付けています。そして、西洋と日本の教育観の違いを語った上で「積極的にしろ消極的にしろ、非社交性はなおしたい。(p.34)」と述べています。

二年間の欧米留学を体験した倉橋は、「積極的非社交性」について、「東洋流のまじめさから見るとそれが高尚に見え(p.31)」るかもしれないが、「人間は社会性があつて皆と一緒に愉快に違いありません(p.31)」と、彼自身の人間観察に基づいたヒューマニズムを語っています。また、「人と一緒になれないのは悪人じゃない、が社会性の発達からいうと困る。(p.31)」という彼の言葉は、子どもにとって家庭環境の影響が大きいことに配慮しつつ、たとえ上流階級の家庭の子弟であつても、園生活を通して子どもの社会性が養われていくよう、倉橋が願ひ求めていたことを表しているように思います。

倉橋の保育理論については、エリートが通う幼稚園の園児との交流から導き出されたとして社会的視点に欠けるとする批判もありますが、この座談会記事の書かれた年の二年前に出された児童保護に関す

る論文^註に目を通すと、「社会性の発達」を彼がいかに広い視野から考えていたかが伝わってきます。

倉橋は「一概にいい子、悪い子、というの人間として価値をつけるだけで人間としての関係生活を考えなさ過ぎます。価値づけは神様の方の仕事で、我々の仕事は子供の関係位置を考えてやる方にあるのです。(p.36)」と発言して、この座談会を締めくくっています。これは、子どもの評価を大人の側から一方的に行うのではなく、子どもが関係の中で生活していることをまず念頭に置き、その生活が一人ひとりの子どもにとつてよりよいものとなつていくよう子どもの間を丁寧に仲介し援助していくこと、それが保育者の役割であり仕事であることを語る力強い言葉として、現代を生きる私たちの心にも響いてくるようです。

どんな時代にあつても子どもたちが自らの生を十分に生きることができるよう、子どもを支える保育の知に学び続けたいものです。



一九三二年『幼児の教育』より

いい子を語る (幼稚園座談会)

倉橋惣三・及川ふみ・新庄よしこ

菊池ふじの・神原きく・徳久孝子

村上露子・小島その

い、子、を、語、る

(幼稚園座談会)

倉橋惣三・及川ふみ・新庄よしこ・三浦ふじの・神原きく・徳久孝子・村上露子・小島その

ね。

倉橋 男の子ですね。

小島 朝などおへやに入ってきて、「おはよう」って

丁寧におじぎをします。

及川 仕事にねばりがとてもあります。

倉橋 そのねばり強いつていうのはほかの組にもあ

りますか。

新庄 ございます。

及川 体もいいし、運動もよくするし、

倉橋 ねばり強いとは仕事を根気よくすることです

か。

及川 それだけでなく、誰かが仕事をやっているか

ら仕事をするというのでなく、他には関わらず、

またやたらに他から動かされないで一生懸命に

するので。仕事の途中でフーッと消えていくこ

とはありません。割合子供には途中で消えていく

ことが多いんですけど。仕事も道具も出し放して

行く子がね。

倉橋 根気強いつていうのは、かなり根本問題です

小島 本当にそうでございます

けど。

が、Tさんはいい子だと思っ

たんとあつて。小島さんい

及川 さあ、誰にしましょう。

×

始めに、及川さん、どうです。

らしいありません。まず

なら七福神どころか八福神く

の話をしませう。いい子供

倉橋 今日は、「組のいい子供」

よ。

及川 体がいいせいもありましょう、いらいらなどちつともしません。やたらにほめるようですけど、運動をよくしますが乱暴ではありません。うちでは乱暴だということですけども。

倉橋 自分で仕事をやり出していくこともありませんか。

及川 ハー。

倉橋 与えられた事をするだけでなくね。——新庄さん。お次はいかが。

×

新庄 私の方、今のところあんまりみんないい子で、一人だけ取り出せませんわ。組を大体二つに分ければ、女の子の方が、あまりいいとは思われません。男の子の方は誰とは言えぬほどよろしいのですが、一人の子供でなくてもよろしゅうございましょうか。

倉橋 でも仮に、具体的に誰のようなと言えば……。

新庄 今の組では同じようによいところをもつ子が

多いので一人をぬき出すことは、ちょっと、出来かねますが、ずっと以前から思いやりがあるのかなかを調べてみたんですけど、思いやりの気持ちをみんなが、相当に持っているのが分かりました。丁は思いやりのところを飛ばうといった方が強いものですから、ちょっと思いやりの例には変ですけど、あの子は外の子がいじめられたり、泣いたりしていると飛んで行って助けます。思いやりが度を過ぎるせいか、それでその相手方をいじめてしまうので皆から暴君のように思われているのです。

倉橋 まあ、あれですか、正義心義侠心の侠客きやくかくのような。

新庄 そうでしょうね。ちつともふだんは目立ちませんが、何か一人で出来ないような子供に、「してあげましょうね」って言ったり、紙などない時には自分のをやったりしますの。

倉橋 男の子は案外やさしいものでしょう。僕のごとく。(笑)

及川 先生に感化されたのでしょうか。

倉橋 一体に、思いやりやさしみつてものは、形に現れるまた現れないにしても、心もちの問題ですが、それは割合にあるでしょうね。

及川 かばう方はうまくやらないと暴君的に裁くようになりませうね。私の組の子でも、「Tさんに言いつけてやる」ってよく申しますから、私「Tさんに言わなくなつていいじゃないか」って言いますわ。

新庄 敵を打つ方を強くやるのでしょうか。

倉橋 一体に、講談物に出てくる侠客親方になつてるんですか。

新庄 始めは力が有り過ぎるのでみんなに立てられたんですの。

倉橋 矢張り侠客が、はじめは社会的に立てられてはいませんが、弱者に対する熱狂性でやった結果認められていくのです。実力が無い時はいわゆるやさしいというところで終りますが、力があるとなると衆が頼みます。

新庄 Tさんを先に持ち出すと思いやりの例には

ちよつと合わなくなりますが、一人ずつ考えるところの子にもかなり思いやりがあります。別にいい子とか何とかと取り出しては申せません。

倉橋 村上さんの方には？

×

村上 男児のSさん、本当に子供らしいというのが

一番いい子と思うのですけど。とても気持ちがいい子ですの。たとえは朝なんか小鳥の居た時など「小鳥ちゃん、お早う」と一人で話しておりますの。お昼食前ひるに私がお掃除してますと、僕、ジヨロ持ってきてあげるとか、ゴミを拾ってくれるとかよく手伝つてくれます。ちよつと見ると乱暴です。口重で何とか口で弁解出来ない時は手が出ます。深く見ていけば皆さんいい子だといえます。仕事をよくしますが、結果を早く見たくて少し乱暴になります。顔を見つめるととってもかわいいですの。

倉橋 まあ、思いやりの先の子と共通なところもある

りましようが心の感じが細かい、デリケートなんだね。見たところ乱暴のようだというのは頼もしい。デリケートというのは見たところで、よくセンチメンタルなところが出るものだが。

村上 一日中外で積木を引き回して遊んでおります。

倉橋 小鳥とあなたに対しては大分デリケートのようですが、友達とはどんなです。

村上 友達を特にかばったりすることはありませんがやさしいんですの。

倉橋 かばうというのはやさしきみの中に積極味があるんだが、その子はやさしきみだけが出る。積極的にやさしきみが出る。心の感じがやさしいんですよ。桃太郎のような子ですね、気はやさしくて力持ち……。(笑声)

菊池 あの家の子はやさしいのね。兄さんもそうでした。

倉橋 新庄さんの方の思いやりの子Tさんはやさしみのほうはどうです。

新庄 思いやりの方だけ調べたんです。調べたの

ですけどそれほどはつきり頭に残っておりません。倉橋 思いやりは、やかましくいえば、センチメン

トで複合的感情です。やさしきみの方は簡単状態です。弱い方がいじめられている、かわいそうだという感情へ、それが不合理だというのが積極的にまざるとかばう。新庄さんのお調べは面白そうですが、どんな形で思いやりは出ましたか。

新庄 思いやりは度々出てはきませんが、かなりはある、のが分かりました。思いやりの全然ない子にはどう感じるものかみたいと思いましたの。

倉橋 村上さんの方の子供は、段々Tさんのような俠客的な傾向は出ませんか。

村上 そういうことは致しません。

倉橋 新庄さんの方のと村上さんのはいい対象だ。子供にもいろいろあるでしょうね。ある子がいじめられるとする。その子にやさしきみを感じてそれでいっぱいの子、泣くな泣くなといったわる、あるいは速くからハラハラしている子、あるいは思えば彼やつが居るからこんなことになるのだと

いう方に積極的に気が動く子もある。大人にもこの種類はある。いわゆるやさしいと名付けられるものには、悪くすると、センチメンタルな傾きが出ます。そこが問題です。村上さんの子供は元氣活発だから心配ない。積極的な子供は、そのうちに、原因を調べずに「よし引き受けた」と安請合いする田舎親分になる方のおそれがある。しかし、冷淡と無頓着に比較すればいい。

新庄 けんかになった時には出ていくものだとさせているようです。

倉橋 いわゆる、やさしみの全然ない野次親分とは違う。

及川 小さい組が入った時には、相対的ではなしにかわいがるんですね。いじめられているから、ではなしにかわいがって遊びます。女の子は特にね。

新庄 Tさんは、そんなふうでいてまた、お休みして少し何かはつきりしない子、遊戯などみんなのように晴れやかに出来ない、そばへ行つて、肩に手をかけてやったりします。そして一緒に歩

こうとします。それは思いやりでしょうね。

倉橋 そうそう。

新庄 Tちゃんは社交性もかなり発達していると思うのですが。

倉橋 社交性の発達ですがね——。村上さんの方のようなのはセンチメンタルになるくらいだから社交性ではない。やさしいという気持ちを心理学者が分析すれば（心理学者というものは悪魔の子注9です）弱い者に対して向こうの弱さに感じて起こるだけの純粹な感情と、その時自己が認識されるのです。強い者に打ちかった時に自分が認識出来る場合と、弱い者に打ちかって自己に満足出来る場合とがあります。弱い者に打ちかって満足できるのは社交性とは反対になります。強い者に打ちかっていく場合には、全体に社交的です。

×

徳久 Mですが、頭もしっかりしております。出来るまで一生懸命に仕事をやります。全体にま

じめで、決してフザけない。遊ぶ時は元気です。

少し気が弱いんじゃないかと思いますが、気持ち
が従順でやさしいのです。

倉橋 そういい子はみんなからどうです。

徳久 好かれております。

倉橋 同年齢の子の中で認識尊敬してゆく力はある
ものですね。

徳久 仕事も出来るので認められております。いま
一人、Hですが、能力は今のところ特に秀でてい
るとは思われませんが、気持ちがとても明るくて
人なつっこくて。

倉橋 一体に能力と善良な性質とは一致しますか？
大きくなると頭のあるものは修養するから違つて
きます。

新庄 私の組では一致しております。私幼稚園に参
りまして以来、こんなに揃つた子供を持ったのは
初めてですの。

倉橋 先生も、教育家としての技量、ご上達は非常な
もの。

(新庄氏はやされる)

新庄 有りがとうございます。(笑)

倉橋 いい子は幸だ。

及川 修養したんでもありますまいしね。

倉橋 いいことをいうね。

新庄 及川さん、しみり仰つたわね。

及川 やっぱり、そこへ来るまでのいろんなことが

原因するわね。

新庄 さあ、今度は神原さん、あなたおっしゃいよ。

×

神原 私の組のいい子、また男の子ですが。

及川 ほんとよ、ぴったり合うのは男の子ですね。

倉橋 エヘン、ところで——。(主事大いに威張る)

新庄 おやおや。

及川 いえいえ、男じゃありませんよ、男の子です

よ。(笑)

神原 いい子って主観になりますね。少し乱暴だと

見る人もありますが、それは元気の余るところと
私は思います。Kなのですが、能力の方は非常に

よろしいのです。自分で遊びや製作をやり出すのが得意なんです、みんなと一緒に遊べますから、いつでも愉快に過ごしております。

倉橋 人にやさしくしますか。

神原 特別に、やさしいところって見ませんけど……。ふだんちよいちよい人をかまいますが、よく強がりの子がほかの子にやるのとは違って、軽い意味のフザケだと思えます。楽しく生活しているという点からいい子ではないかと思えます。

倉橋 そういう子もあるでしょうね。自分が不愉快にしていれば他人も不愉快でしょうからね。こんどは菊池さん。

×

菊池 やっぱり男の子ですが、人との関係では、やさしみデリケートだとは思いませんが、とてもよく遊びます。さっぱりした子です。仕事の方はもっとほかによくする子がおりますが、遊びに没入しております。人につき合う時コマコマと告げ口や干渉はいたしません。

倉橋 えらく超然でもなく？

菊池 相当力もあります。先日新庄先生の方のTちゃんとやり合っていました。小さい組ですのにね。感心しました。自分がいじめられる道理はないと思つて有つた力の力を出して戦つたんです。ふだんちつともそんなふうには見えませんが。仕事の方では、入園当時はもじやもじやの絵をかいておりましたが、伸びそうな気がします。兄たちもそうでしたから。遊ぶ様子がそうです。

倉橋 明瞭に分かるために、その反対の子を考えてみてください。

菊池 村上さんの方のSさんは、悪い意味でなく、反対です。

×

及川 いい子は、みんな健康ですね。

新庄 そうですよ、Tちゃんは、リングは一時に二つ、バナナは三本くらいいただきますのよ。

倉橋 だからアツパレアツパレ(アツパルアツパル)二つ言わなくちゃ。(笑)

菊池 ご飯をすっかり食べます。

倉橋 矢張り、性情がいつていうのは内臓からい
いんですね。人格といったって胃腸腸格もいいん
です。

及川 健康な時は胃や腸がどこにあるかを意識しま
せんよ。

倉橋 子供だって気分が悪い時もあるうから。

及川 皆さんが今仰った人たち、血色もいいわね。

倉橋 女の見るといい子は、どうかすると、病的では
ないけど、百パーセント健康でないところに、軟
弱美・繊細美・病的美のあげられることがあるが、
皆さんの目はさすがに高い。

×

倉橋 その人たちの生まれ順はどうです。長子とか
ひとりっ子とか。

及川 私の方のは、姉さんが二人、弟が一人。

新庄 まあしばらくTちゃんはいいい子の中に入れてな
いでください。

村上 Sさんは兄一人、妹一人。

徳久 長男です、妹が一人。

神原 Kは長男で、弟三人、妹一人。

菊池 兄二人、妹一人。

倉橋 この五、六人の数で結論は出せませんが、い
い子には能力も随分関係ありますが、能力の方は
むしろ遺伝ですが、総領が利巧リウウでないとすれば親
が成熟してなかったとか生理的に説明されます。
性質の方は多分に生後の家庭生活の状態が関係し
てきましよう。その中にも兄弟の影響は大いにあ
るはずのものです。別に研究したわけでありませ
んが。——今日は偶然、長男が二人あったわけ
ですね。

×

倉橋 組にリーダーがおりましよう。一人か二人
か。そのリーダーシップと今の子との関係はどう
ですか。

及川・菊池 リーダーになりませんわ。

倉橋 リーダーはほかに居るわけですね。先生のい
いと思う子必ずしもリーダーではない。

徳久 リーダーになる人は暴君のようですね。

菊池 私の方のリーダーはIさんですが、人がよくて立てられておりますわ。

村上 及川先生の方は、リーダーはKさんですね。

及川 遊ぶ時になると、Kのような小さい子にみんなヒヨコヒヨコ従っております。どんなわけかと思いましたが、大きい組になって、テスト式にやってみましたところが、実力もあるのです、ただ遊ぶ時だけの大将ではないのです。

倉橋 この前の座談会の幼児の社会生活問題から研究的につづくのはリーダーの問題です。これは直接にはその子の問題というよりもこの年齢における人物批判の標準というものの研究ですね。アメリカで大統領になれる人が、南洋で大統領になれるかどうか分かりません。大人が見てリーダーと思われる人必ずしも子供の中のリーダーにはなりません。前の大人の見たいい子がリーダーになつていないのは、子供の低級観だけでないかもしれません。大人には見つからないものがあるかも

しれません。ところで、そのいい子供は段々わかってくるのですが、幼稚園に入った時から持つてくるんですね。

及川 そうでございませすよ。

倉橋 遺憾ながら及川先生の教育力が入ってはいないのですか。(笑)

菊池 私の方のは、始めはそれほどいい子とは思いませんでした。

新庄 私の方の一人の子が、夏休みまでは何かがはつきりしなくてお母さんも心配しておりましたが、二学期ごろからぐつとよくなりました。今までは、これで小学校へもうまく行かれるかと心配しておりましたのに。気がついた始めは大変に動作が乱暴になったということに気付きました。元気が出たなと思ううちに、ぐつと仕事が変わつてきました。

倉橋 そういう変化はまあることですか。

及川 ありますね。ある時期にすつと伸びます。

新庄 どうしてその子だけそうだったのか不思議な

んですけど。

及川 大きい組になるとずっと伸びてきます。

倉橋 上級生ですね。そこらに、そんな時期があるのかも分かりませぬね、青年期になる前に発達がジャンプしたりするように。これで幼稚園にはいつて悪い方になるといふような子はないものですかね。

新庄 それはわるくならないようにしよつちゆう気をつけてきたからじゃないでしょうか。

倉橋 恐れいりました。(笑)

及川 先生の「就学前の教育」の第一頁にありますね。「就学は学齢からと誰がいいそめしことか」と。この変化の時期とちゃんと合うから感心しました。

倉橋 誰が実験心理学的に割り出したのか分かりませんが、よく当てていきますね、えらいものです。

新庄 古い本を調べますと、寺子屋でも数え年の六月六日に初めて寺入りすると手が上がるといわれ

ているそうです。

倉橋 世界中ですね。

菊池 悪い子供でも、その時期になったら……と楽しみにして待ちますわ。

倉橋 注意しているから悪くならないと同様に、よくなる方へ持っていくこともあるのでしょうかね。幼稚園効果がそこへ蓄積するように。菊池さんは小さい時から待っているそうですが、その中おたのしみですね。幼稚園教育の効果は何も何十年後を待たなくともいいんですね。

菊池 幼稚園の蓄積期は今初めて伺ったんですけど、ど、お互いの影響がありますからね。

倉橋 いやどうもご謙遜で(笑)

x

倉橋 いわゆるの長所でなしに——大人の場合に適用品でも立派な値打ちあるものを長所としないで——子供らしい無邪気・単純・朗らかななどにおいて、子供により区別がありますか……。これは子

◆子どもの長所を巡る省察

「いい子を語る」の記事も、女高師附属幼稚園の保母一同と幼稚園主事の倉橋との座談会筆記録です。開催時期は、おそらく前掲の座談会の約一か月後に行われたものと思われれます。

「今日は、『組のいい子供』の話をしましょう。いい子供なら七福神どころか八福神くらいはありましようね。(p.39)」との倉橋の言葉を皮切りに、スムーズな話し合いが始まっています。その途中で彼は「この前の座談会の幼児の社会生活問題から研究的につづくのはリーダーの問題です。(p.47)」と述べて話し合いの方向付けをしています。このリーダーの問題について、倉橋は、子どもに即した視点を保母たちに示す、次のような発言をしています。「大人が見てリーダーと思われる人必ずしも子供の中のリーダーにはなれません。前の大人の見たい子がリーダーになっていないのは、子供の低級

観だけでないかもしれません。大人には見つからないものがあるかもしれません。(p.47)」

大人の間で子どもの姿を語っていく時、子どもの視点に立つことを大人たちが常に意識していなければ、いつの間にか保育の実際から乖離かひりして大人の視点からだけ子どもを見ていくことになりやすいことを、私たちはこの話し合いから学ぶことができると思います。また、「組のいい子供」を語っていく中で、「いい子供」とは一体どんな子どもか、ということを一人ひとりが深く考えずにはいられないような話し合いが、ここに生成しているように思われます。

倉橋は、この話し合いの最後を次のように締めくくっています。「いわゆるの長所でないに——大人の場合に適用しても立派な値打ちあるものを長所としないで——子供らしい無邪気・単純・朗らかなどにおいて、子供により区別がありますか……。これは子供に普遍的なものでしょうね。(p.48-49)」

子どもの長所を考える時、大人にも通じる長所を

考えるのではなく、あえて子どもに独自の長所といえるものに目を向けていく倉橋の視点は、この当時の保母たちだけでなく、今を生きる私たちの心にも訴えるものがあるのではないだろうか。この倉橋の最後の発言の中で語られている子どもとの出会いの具体的な場面は、倉橋がいかに子どもの世界にたやすく入り込んで子どもと心を通わせていたかが、手にとるように伝わってくるものとなっています。

子どもに普遍的な長所に触れていく時のここでの手応えは、単に子どもを肌で知るということを超えて、倉橋自身の内側で子どもの普遍性が感受されていく大事な一瞬であったことを物語っているように思われます。

子どもに生きた倉橋が座談会の中で語っていた子ども観は、一人ひとりの保母たちにとっては具体的な子どもとの姿と重なり合い、まさに子どもの実質を伴うものとして受けとられていったのではないのでしょうか。

◆座談会という方法

倉橋は、その著書『育ての心(下)』の中で省察について次のように述べています。

省察で幼児の心が判るといふことは、確かに事実である。(略)是が誰でもあるといふものではないことは勿論である。即ち省察で幼児の心が見えるといふことを以て自分にも出来るると容易に信じ得るわけにはいかない。其処に一段の危険がある。ひとり合点の危険がある。ひとりぎめの危険がある。約めていえば判ったと思ふことにしてしまふ危険がある。殊に省察によつて得たところのものは、これを第三者に表わすといふことに於いて確実なる方法を有たない場合が多い為に、自分で判ったと思ふことに對して、批判と訂正とを受くべき機会がない。^{注11}

保育の省察が保育者と子どもとの関係性の中で行われることであるために、保育者の偏見によって子どもの姿がとらえられていく危険性を、倉橋はすでにこのように指摘しています。

この『育ての心』の初版本が出された一九三六（昭和十一）年よりさかのぼること七年、一九二九（昭和四）年の『幼児の教育』第二九巻第七号に、「保育座談会」の第一回が掲載されていますが、それ以来、年に四、五回というペースで数年間連載が続きました。

倉橋が、自身の研究を東京女子師範学校附属幼稚園の保母との共同研究であることを明言していること^{注12}からみても、この座談会にも倉橋の研究としての意図が込められていたことは想像に難くないところです。保母たちが保育の中で見えていることを座談会の場で交換しあうことよって、「自分で判ったと思うことに対して、批判と訂正を」自ら受けとつていく機会とすることを、倉橋は研究の意図として構

想していたのではないでしょうか。

保育の省察は、基本的には一人ひとりの保育者が具体的な実践を通して行うものですが、倉橋も指摘しているように、「ひとり合点の危険」と背中合わせであることも現実です。その危険から離れ、さらに普遍的な視点へと自己を開いていくために、他者の視点に自ら出会い、自己の視点に修正を加えていく機会をもつことが、結局のところ、個人々人にある省察を高め、また深めることにつながるものであることを、私たちはこの座談会の記事を通して学びとることができるよう思います。

本稿では、倉橋の『省察』に焦点を当て、さらに幼稚園座談会にある共同の省察へと論を進めてきました。ここで用いた「省察」の言葉は、英語の *reflection* の訳語一つをとつても「省察」であったり「反省」であったりするように、まだその意味合いが定着しているとも言えません。しかし、日本の保

育の実践研究の蓄積の中で比較的早い時期から省察(反省)が重視されてきたという事実は、ここに明らかにしたとおりです。

保育の省察は、今後、シヨーンらの研究による省察の知との間で相対化されることによって、さらに新たな研究のステージで語られていくことになるでしょう。
(お茶の水女子大学専任講師)

注(引用・参考文献)

1 倉橋惣三文庫3 『育ての心(上)』フレーベル館

二〇〇八年 p. 46-51

2 *D.A. Shon The Reflective Practitioner Basic Books,*

1983

佐藤学・秋田喜代美訳 『専門家の知恵』ゆみる出版

二〇〇一年

柳沢昌一・三輪建二監訳 『省察的实践とは何か』

鳳書房 二〇〇七年

3 津守真『保育の体験と思索』大日本図書 一九八〇年

p. 9

4 『幼児の教育』第二十六卷第九号 一九二六年 p. 2-5

5 『幼児の教育』第四十三卷第三号 一九四三年 p. 2-4

6 『幼児の教育』第四十九卷第一号 一九五〇年 p. 2-3

7 『幼児の教育』第三十一卷第十二号 一九三二年 p. 26

35

8 倉橋惣三「児童保護の教育原理」高島巖編『社会事

業大系 第二卷』日本図書センター 二〇〇三年

p. 1-59 (中央社会事業協会一九二九年刊の複製)

9 倉橋が大学で心理学関係の講義をする傍ら幼稚園主

事を務めていたことから、「悪魔の子」という表現

は、自らの立場を卑下していたことを感じさせる。

10 『幼児の教育』第三十二卷第一号 一九三二年 p. 2-11


11 倉橋惣三文庫3 『育ての心(下)』フレーベル館

二〇〇八年 p. 22

12 倉橋惣三『幼稚園保育法真諦』東洋図書 一九三四年

p. 4 (倉橋惣三文庫1 『幼稚園真諦』フレーベル館

二〇〇八年 p. 5)



園のくらしを育む 10

日本の保育文化(4) — 行事と製作 —

秋田喜代美

1 行事と製作


五月にはこいのぼり、七月には七夕飾り、十二月にはクリスマスツリーや靴下、二月には節分の豆まきの入れ物、三月にはおひな様など、多くの園では、行事と合わせて伝統的に製作が行われます。子どもたちはその製作過程を通して、行事へのイメージを膨らませていったり、行事の日へ思いを高めていったりしています。行事の精選が言われますが、おそらく日本の保育のアイデンティティ、そして家庭では行わなくなってきた伝統文化が園だからこそ伝えられるものとして、行事が行われ製作も行われていくだろうと思われれます。

三、四、五歳という育ちの中で、同じようなものでもどのような素材や大きさのものを各年齢で作るのかは、園での伝承、子どもの育ちを見取る保育者の実践的な見識によって異なってくるように思います。家庭に持ち帰り、親も見るとのこと、出来

上がりの見栄えがそれなりにそろっていてどの子にも同様のものを持たせたいという、結果のところでの完成度にこだわる園もあれば、それぞれの子どもが自分の思いで作る過程こそが大事なことから、保護者にもその園側の思いを伝え、子どもが創意工夫した作品をとという園もあります。ここに保育観は表れると思うと同時に、園において二年なり三年あるいは六年なり繰り返し返して経験する行事だからこそ、どのような活動を保障していくことが保育の質としては必要かを考えたいと思います。

2 豆の入れ物作り

二月の豆まきの入れ物や三月のひなあられの容器を、先生方の園ではどのようにして作成するよう指導されているでしょうか。福島めばえ幼稚園で三年ほど前に行われた実践のビデオは私にとってはとても心に残るもので、国内外のいろいろな研修の場でもご紹介させていただいています。保育の質を活動の次元で考える一つの契機にもなりました。皆同じ入れ物を新聞紙や折り紙で折ってみる実践はこれまでよく見てきたので、それとの対比で、子どもが創意工夫する経験のあり方を考えさせられました。「豆まきのお豆（あるいはひなあられ）がちょうどカップ一杯入る入れ物を自分たちでそれぞれ作ってみよう」という課題を園として設定し、三、四、五歳で各クラスの子どもたちができるように製作をしてみたかという実践をDVDで記録し行った、園内研修のビデオを見せていただきました。



先生は同じことを伝えても、受け止める子どもたちの年齢や能力により、どのように作り出されるか、そこに現れる姿は実にさまざまです。

三歳の子どもたちは、紙を丸めて鬼の金棒のような筒状立体を作ったり、紙を二つに折ってセロハンテープで留めて封筒状の袋を作ったりしています。先生が入れ物としての機能を果たすようになっていくかを確認するために豆を実際に入れてみることで、セロハンテープが貼られていないすき間等から豆がもれることに気づいて作り直しをしたりしています。先生に認めてもらおうのがうれしくて、銘々が作って先生に見せています。子どもたちにはまだ立体の面についての感覚はないことがよくわかります。

しかし四歳になると、立体を作っています。時には底面が足りなかったり、途中で気づいて何とか工夫したりし始めています。作る時にテープやホチキスで留めるのに相互に協力して作ったりして、友達の影響を受け合う姿もあちらこちらで見られます。いろいろな形の入れ物を自分なりに工夫して作ることもできるようになっているのがわかります。

そして五歳になると、量に敏感になり、本当にちょうど一杯分入るかどうかを予想して「多い」「小さい」などと語り合いながら豆を入れてみて、友達のものでもうまく入ると喜び合い、うまくいかないともうちょっとと工夫を重ねる姿が見られました。また中には前の袋をかたどって紙を切り抜く子がいたり、数ミリでもびつたりの大きさにこだわりの子がいたりします。「失敗して、失敗して、またやってみよう、何度

でも失敗して、それが人生」と五歳の一人の子がつぶやきます。そこには自分なりの目当てをもちながら挑戦していく姿、自分を励まし続けながらちよつぱり大人びた言葉を語ってみる姿があつたりします。そしてそれぞれの入れ物にまさにその子の工夫が表れていました。

こうした実践は三、四、五歳と発達すれば見られるというのではなく、園でさまざまに紙で立体的なものを自分で作る経験を積み、それなりの手先の器用さや入れ物の量の感覚などが培われて初めて可能となる姿です。先生の言われたとおりに作る入れ物が悪いというのではありません。それもまた貴重な経験です。しかしその一方で、創意工夫しながら作り出す行事の実践もあると思うのです。そして、そこで初めて行事の活動がそれまでの経験を活かし、さらにそれが行事というだけではなく、また次の子どもなりの遊びや活動につながっていく経験になると思われます。そしてこうしたビデオを研修で相互に見ることで、園としてこのように発達してほしいという育ちの姿を若い保育者も一緒に見て、見通しをもてる機会になるのではないかと感じました。

園の行事は、文化的に受け継がれてきた心を伝えると同時に、それが明日のくらしへの一つの節目になっていく、日本の子どもたちや保育者にとって大事なものです。行事に追われるのではなく、行事から新たに始まる保育であってほしい。それが園の力と文化になるのではないのでしょうか。

(東京大学大学院教授)

地域に生きる

佐藤キミ男

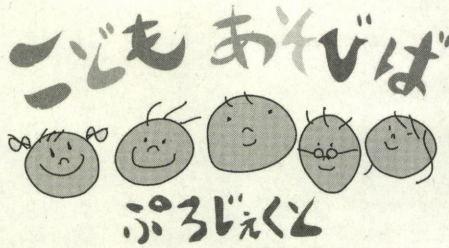
「障碍のある子どもたちが、日中、安心して過ごせる場所を！」と、平成十八年五月から活動が続けていた

「障がい児放課後クラブはすねっこ」（東京都板橋区蓮根における実践。以下、「はすねっこ」を昨年（平成二十二年）三月、私は離れることになりました。これまで受託していた団体が運営上引き受けられなくなりましたというのがその直接的な理由です。

立ち上げからの四年間、本気で子どもたちとかかわり、子どもたちの生活を支えてくれたスタッフをはじめ、保護者、地域の方々、ボランティア、学生（実習生）

など、本当に多くの方々によって、「はすねっこ」は支えられてきました。

私自身、「はすねっこ」を離れることは本意ではありませんし、これまでの保育の形態の存続を強く望みました。そのために、福祉分野においても実績のある区内のNPO法人に新たに受託を依頼しプロポーザル（委託事業者決定のための審査）にかけたのですが、私たちの願いもむなしく、板橋区は別の法人を選択しました。どちらかというと「保育サービス」重視の団体でした。私にとっては、まさに青天の霹靂へきれきでしたが、



同時に、行政や受託団体と現場との「温度差」を調整できなかったことを反省もしました。

心残りには、「はすねっこ」での子どもたちの生活のことです。今までとは異なる生活の流れに、子どもたちはきつと戸惑うに違いはない。子どもや保護者が自由に選択できるよう、新たな場をつくらなければ――。

区が別の団体を選んだことを知った直後、すぐにでも新しい活動場所をつくって

始動しようと思いましたが。しかし三月までは利用予約を受け付けていたので、このまま「はすねっこ」を離れるのは現実的でないことはわかっていました。実際、引き継ぎもかなり大変な作業でしたし、すぐに新しい活動に移ることは不可能でした。それでも、ほとんどのスタッフが「新し

い子どもたちの居場所づくり」に賛同し、協力してくれました。安定した場所の確保はまだまだ先の話だとしても、まずは、子どもたちが集まって、何とか数時間を過ごすことができる場所を探すことから始めよう。アイデアを出してくださる方が何人もいたことは、本当に幸せなことでした。適当な場所はないだろうかと思案を巡らしている時、集会所を借りてみたらどうかとのアイデアをいただきました。

そして四月、「こどもあそびばプロジェクト」（以下、「あそびば」と称し、子どもたちとの新たな活動を再開したのです。

「借り暮らし」が始まった

新しい活動の場所は、十一階建て都営団地の一階にある公共の集会所です。「はすねっこ」からも程近い距離にあり、利用する子どもたちにはそれほど不便や戸惑いを感じさせないだろうと思いい、この場所に決めました。

「あそびば」の活動は原則として月二回。活動時間は午前十時から午後四時までの六時間。弁当持参、参加費は千円です。参加費は、施設使用料と子どもたちやスタッフの飲み物やおやつで、ほとんど使い切つてしまいます。ですから、「あそびば」にかかわってくれているスタッフは全員ボランティアです。利用してくれる子どもたちの家庭状況を考えると、参加費の金額はもつと下げられないかと、今も悩んでいます。

初めての「あそびば」の活動日、五人の子どもたちが参加してくれました。

最初に来た中学生のYは、少し緊張した表情を見せていましたが、スタッフと互いに顔を近づけ合うとニコッと笑って、「はすねっこ」で遊んだことを思い出してくれているようでした。

次に来た小学四年生のGは、ニコニコしながら、広い和室の畳の上に円を描くようにしばらく走つていましたが、舞台袖にある物置のような場所を見つけると、スタッフと一緒にその小さな空間に何枚もの座布団を

敷き詰め、その場を囲うようにござを立てて、自分の「棲み家」をつくりました。

高校生のAとMは、何でここに「はすねっこ」スタッフがいるのだろうと戸惑っている様子でしたが、すぐにスタッフを誘い、「はすねっこ」でも好きだったブロックで遊び始めたり、スタッフと一緒に音楽を聴いたり本を読んだりし始めました。

正午過ぎ、ちょうどみんなが弁当を食べ終えたところに現れた中学一年生のSは、「今さっき起きたところなんです」と父親が話している傍らで、すでに好きな絵を描き始めていました。

子どもたちが変わらずに好きな遊びを楽しみ、自分のペースで過ごし始めてくれたことに安心しました。しかし同時に、「はすねっこ」のようにダイナミックな子どもたちの表現を充分に受け止めることができるのだろうかという不安もありました。

集会所は公共の施設ですから、私たち以外にも利用者がいます。他の利用者と共存できるよう、畳や障子、

置いてある備品などを傷つけたりしないよう、少しだけ気兼ねしながらの生活。昨夏公開されたメアリー・ノートン原作の映画「借り暮らしのアリエッティ」の小人たちの暮らしに少し重なる、まさに「借り暮らし」の活動が始まりました。

つながる想い

「借り暮らし」を始めた集会所には、Sさんという管理人がいます。下見のために集会所を訪れた時、とてもいいねいに案内してくださいました。Sさんの説明を受けながら、少しずつ活動のイメージができてきた私は、自分の内にある不安を話しました。

「元気のいい子どもたちなので、ほかに利用している方たちが気になることもあるかもしれないのですが……。」

Sさんはさらっと「お互いさまだから」と言うと、また次の場所の説明を続けました。Sさんのこの「お互いさま」という一言で、これからの活動を支えても

らえるように思い、この場所を選んでよかったと実感したのです。実際に活動が始まってからもSさんの様子は変わることなく、スタッフたちもSさんとの信頼関係の中で、子どもたちとダイナミックに遊ぶことができます。

また、「あそびば」のロゴをデザインしてくれたKさん、お茶の水女子大学こともプロジェクトの皆さん、院生のMさんとRさんほか、多くの方々がこの活動を応援し協力してくださいありがとうございます。

場の安定しない「借り暮らし」の活動ですが、人とのつながりが基盤となつて、少しずつ安定した子どもたちの居場所ができてきていることを感じていきます。



Tとの再会

二回目の「あそびば」の日、集会所から散歩に行く途中、私たちはばったりTに出会いました。小学三年生のTは、中学生の姉を含めた四、五人の子どもたちと一緒に遊んだ。この仲間がよく遊んでいるようでした。私たちの顔を見ると、びっくりしたように「先生たち、何でここにいるの？ どうしたらここに遊びに来られるの？」と聞いてきました。

Tも「はすねっこ」で出会った子です。Tには姉兄弟が四人いるのですが、四人全員が特別支援学校や特別支援学級に通っています。両親は健在ですが、生活が安定していません。母親はパチンコなどに興じてしまいうことが多く、子どもたちと日中かかわることがほとんどないようでした。当然子どもたちの安定した居場所はなく、商店の品物を持ってきてしまうこともあるようで、心配した学校の担任のN先生が「はすねっこ」の利用を母親に勧めたのです。

「はすねっこ」でのTは、とても落ち着いていました。スタッフでも手間取っていたテレビとビデオレコーダーをいとも簡単に接続し、好きなDVDを再生しては楽しんで見るなど一人ですぐにできます。スタッフの手を借りず、何でも一人でやろうとする。一見しっかりした「いい子」のようにも思えるのですが、Tと遊びながら、彼が誰のこともあてにせず育っていく姿をふと想像してしまい、心配になったことを思い出しました。

私たちと「あそびば」で再会した後も、姉や友達と過ごしながら、Tは集会所を時々見ていたようでした。そして五月の活動日に、再びTと出会いました。集会所の中の様子が気になり近寄ってきたTに「入ってくる？」とスタッフが声をかけましたが、首を横に振り、自分たちのグループに戻っていきました。本当はここで遊びたいのかもしれない、と彼の気持ちを感じながら後ろ姿を見送ったのですが、しばらくすると、Tは戻ってきて、「さとう先生！」と、窓の外から私に声

をかけました。そして黙って茶色の袋をぐっと私に差し出しました。中にはポテトが数本入っていました。「もらったいいの？」と聞くと、「うん」とうなずき、「ありがとう」と言葉を返す間もなく、Tはまた自分のグルーブに戻っていきました。

子どもたちの居場所

子どもだけで行動しているTたちのグルーブを見ながら、ふと私は自分の子ども時代を思い出しました。

私は「がき大将」でした。昭和四十年代半ばのことです。近所の子どもたち五、六人を引き連れて、いつも近くの路地で遊んでいました。大人たちの目からちょっと離れた所で、子どもたちの世界を楽しんでいたような記憶が残っています。けれど、当時の子どもたちの世界は、大人たちの目から全く切り離された所にはありませんでした。身体はどこかで、子どもたちは大人のままざしを感じながら遊んでいたような気がします。何かに守られているという安心感が子どもたちの遊び

を支え、豊かにしていたのではないのでしょうか。

Tたちのグルーブには今、どれくらいのままざしが注がれているのでしょうか。彼らは今、誰かに見守られているという感覚をどれくらい感じながら生きているのでしょうか。

子どもたちに向けられるままざしは、「監視する目」であってはなりません。「大人」として、「地域住民」として、私たちがどのように子どもたちへままざしを注いでいくのが、今問われているのだと思います。Tたちにとって「あそびば」が生活の拠点の一つになるように考えていくことは、同時に、地域で暮らす子どもたちが安心して過ごすことができる居場所の一つとして「あそびば」が定着していくことにつながる。私は考えています。

「少しばかりの気兼ね」や「お互いさまの気持ち」を含んだ「人とのつながり」を大切にしながら、これからも私たちは「あそびば」を続けていこうと思います。

(子どもあそびばプロジェクト代表)

編集後記

ちょうど50年前の『幼児の教育』、つまり第60巻の第1号はどんなだったのかしらと見てみますと、表紙絵が岩崎ちひろさんの筆によるものでした。ふうわりと丸顔の、真っ黒いつぶらな瞳をしたかわいらしい男の子と女の子が小さな猫を見つめています。このころ岩崎さんは『キンダーブック』の挿絵もよく手掛けていました。同じ号の草野淑子さんという方による記事「今年の課題」には、幼小連関の必要性や職場の合理化について書かれています。まさに現代の問題とも重なる内容で、半世紀という時間の隔たりを感じません。

本誌のアーカイブズは、今の問題が実は過去とつながっていることを如実に教えてくれる貴重な資料です。保育（研究）史を身近に感じていたいものです。 (H)

幼児の教育 第110巻 第1号

平成23年 1月1日発行
編集兼発行人 浜口順子
編集担当 金子めぐみ・田中恭子
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社フレーベル館
☎03-5395-6604（編集）
振替 00190-2-19640
印刷所 図書印刷株式会社
定価 550円（本体524円）
©日本幼稚園協会 2011 Printed in Japan

編集協力 フレーベル館
表紙絵 後宮ひろみ
扉題字 津守 眞
本文カット 田崎トシ子
編集スタッフ 吉岡晶子
佐藤寛子

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613（営業）

●次号予告

〈特集〉創刊110年企画

『幼児の教育』アーカイブズ集2

・本誌歴代編集主幹による

「『幼児の教育』にかけた思い」（2） 本田和子

☆次号の内容は、都合により変更される場合があります。

『幼児の教育』バックナンバーがネットでご覧になれます！

お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション”TeaPot”

<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/3705/bulletin/>

へ、アクセスしてください。

明治34年発行の創刊号から、現在、平成19年発行の第106巻まで公開されています。ご意見・ご感想などは、youjimap@yahoo.co.jpまでお寄せください。

55冊の絵本紹介！ 読み聞かせのアイデア、エッセイまで！
読み聞かせの達人による、絵本ガイドブック

聞かせ屋。けいたろう 絵本カルボナーラ

～ おいしい絵本を召し上がれ！～



絵本を子どもにも大人にも！

著者が読んできた秘伝の55冊の絵本を、オールカラーで掲載。作品紹介、読み聞かせのQ&Aからテクニック紹介まで。読み聞かせの活動を通した、新たな絵本の魅力が満載の1冊！

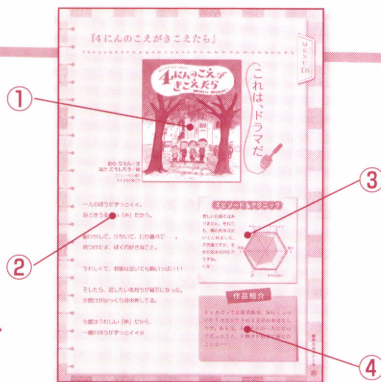
聞かせ屋。けいたろう／著

21×15cm 96ページ 定価1,260円(税込)

10921

作品内容、読み聞かせのエピソード&テクニックや、はたまた、読み聞かせ実況中継まで！
素敵な絵本との再会をお届けします。

- ① 絵本表紙
- ② けいたろうコメント
- ③ 読み聞かせのエピソード&テクニック、作品データ
- ④ 作品紹介



好評発売中

“森のようちえん”での活動を撮った18万枚の写真から厳選！ 保育・子育てのエッセンスが詰まった写真集

子どもと森へ出かけてみれば

小西貴士／写真・ことば

自然の中で子どもたちは
こんなにいい顔するんだな

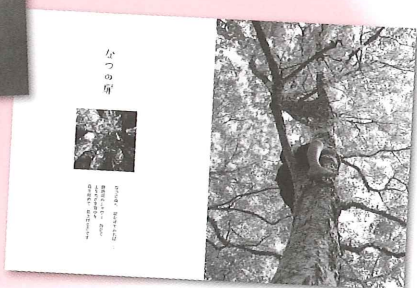
いろいろな葉っぱがあるけれど
同じ葉っぱはないように
あなたはあなたのままでいいですよ
そのまんまが素敵です
森は、そんな風が吹いている場所
ページをめくり
森のお散歩を楽しんでくださいな



24×18cm 76ページ 定価 1,575円 (税込)

10920

オールカラー



- 四季の森で育つ子どもたちの写真とやさしいことばで織り成すとおきの世界
- 巻末「子どもと森へ」
寄稿：汐見稔幸氏、上遠恵子氏、細谷亮太氏

定価 五五〇円(本体五二四円)☆

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

● シリーズ 3 巻完結! ●

総勢101人から贈られた、保育へのメッセージ

THE 保育 -101の提言- vol.3

無藤 隆 編著



10503

26×19cm 226ページ 定価2,100円(税込)

21世紀の子どもをどう捉え、どう見据えていくか、様々な分野の著名人による保育への提言。vol.3は、フレーベル館の保育図書編集委員のほか、保育研究者や各界の著名人の提言も掲載した完結編。

執筆 者 (50音順)

網野武博(東京家政大学教授)、池谷祐二(脳科学者)、池谷奉文(日本生態系協会会長)、石津ちひろ(絵本作家)、内田麟太郎(絵詞作家・詩人)、大澤 力(東京家政大学教授)、大日向雅美(恵泉女学園大学大学院教授)、岡本弘子(高崎健康福祉大学短期大学部教授)、落合恵子(作家・クレヨンハウス代表取締役)、かづきれいこ(フェイシャルセラピスト・歯学博士)、金井真介(ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパン代表)、上遠恵子(レイチェル・カーソン日本協会会長)、小林紀子(青山学院大学教授)、古賀稔彦(柔道家)、小菅正夫(獣医師・旭山動物園前園長)、佐伯一弥(東京家政大学短期大学部専任講師)、佐々木宏子(鳴門教育大学名誉教授)、汐見稔幸(白梅学園大学短期大学学長)、柴崎正行(大妻女子大学教授)、鈴木 寛(文部科学副大臣)、鈴木光司(作家)、高橋 和(女流棋士)、ダニエル・カール(タレント)、吉米地英人(脳科学者)、長倉洋海(写真家)、長崎宏子(スポーツコンサルティング会社取締役・元五輪水泳選手)、浜 美枝(女優)、パトリック・ハーラン(タレント「バックスマックン」)、細谷亮太(小児科医・聖路加国際病院副院長)、増田まゆみ(自白大学教授)、師岡 章(白梅学園短期大学教授)、山極寿一(国際霊長類学会会長・京都大学教授)、葉 祥明(絵本作家)、吉村作治(エジプト考古学者)、渡邊真一(学校法人初音丘学園理事長)

好評発売中



10501

vol.1

【執筆 者】

小柴昌俊(ノーベル物理学賞)
椎名誠(小説家)
田原総一郎(ジャーナリスト)
坂東眞理子(評論家)
日原重明(医者・文化勲章)
やなせたかし(絵本作家)
ほか多数



10502

vol.2

【執筆 者】

アグネス・チャン(タレント・日本ユニセフ協会大使)
紺野美沙子(国連開発計画親善大使・女優)
ピーター・バラカン(ブロードキャスター)
村上康成(絵本作家)
米村でんじろう(サイエンスプロデューサー)
ほか多数